

# 儒教の宗教性に就て

國民精神文化研究所員 藤澤親雄

現代は世界的に考へて比類無き轉換期である。時代は古代・中世・近代と發展したが、其の所謂近代なるものは、外面的に華々しい時代であつたが、それは既に爲すべき役割を果して、指導性を失ひ、今や全く本質の異なる史代に移行せんとしつゝあることを直觀せしめる。勿論、論理的的確に之を證明することは困難であるが、運命的直觀を以て爾く洞察することが出来るのである。

この動きはいつから始まつたか、これ亦明確に論定することは許されないが、近代が終を告げて新史代が初まつたポイントと見られるギリギリの分水嶺的な事件は、一九三五年の夏に蘇聯の莫斯科で開かれた第七回コミンテルンの世界大會であると思ふ。この出來事は、種々の重要な意味を持つてゐるが、殊に最も重要なのは、其のコミンテルン大會を契機として、世界がイデオロギーの上で分れた事である。即ちソ聯の共產主義者と、英佛等の社會民主主義者及び自由主義者とが相提携して、國際的人民戦線を結成し、それが本質的に異なつた世界觀を持つ事に於て共同の敵たるファッショ國家群(主として獨逸と伊太利であるが、ソ聯は東洋に於ての日本を之に加へて呼ぶ)に對して決死的に挑戦した

事である。人民戦線のイデオロギーは近代のシンボルであつたが、それは既に過去の事で、今やそれは衰頽と崩壊の一路を辿り、歐羅巴では獨伊のイデオロギー、東亞では我が皇國日本の思想が、ほのぼのと明け初める新時代の指導原理たらんとしつゝあるのである。此の不可避なる世界史の大轉換期に當つて、我々は色々の事を考へさせられるが、就中重要な問題として、何故に近代が轉落の運命に逢會したか、その根本理由を考へて見ると、それは一言にして言へば神と人との根本的な有機關係が破壊され、且つ失はれた事に存するのではあるまいかと思はれる。近代が出發したルネッサンスの時代に於て、歐洲に於ける近代人等は、所謂「人間の解放」を叫んだ。要するに超個人的、中心權威的なのから自由になり、人間の主觀的な理智と體驗のみを基礎として自由奔放なる新生活を營まんと欲したのである。即ち之を東洋流に言へば、所謂天人合一の正しき人間的在り方を忘れ、之を破壊し去つて、天地相離れたところに自由の生活しようとしたのが、所謂近代の特徴だつたのである。一切の權威の桎梏から離れて人間本位に思ふがまゝの活躍をするといふ事は一面確に痛快な事で、其の勢ひに乗じて近代が從來の世界文化を攻略征服し得たのは事實であるが、其處には一つの弱點があつた。それは個々の人間を無理なく一つに結びつける生活の絶對的中心が存在せぬ事である。權威ある宗教原理がない事である。そして其の缺陷は年と共に段々大きさを増した。依るべき中心のない個我的生活は必然的に分裂を生じ、階級的對立鬭争を招致し、遂には無政府状態を現して、拾收が出来なくなつた。それが近代自由主義末期の症状である。斯うなると最早、理窟の夢は見てゐられない。どうして生活して行くか緊要な問題である。そこで何とかして新しい原理を立て、此の亂離の状態を拾收せねばならぬといふ氣持が世界の有識層の間に起つて來た。即ち近代世界の共通症状たる個我的對立、鬭争、分裂の状態を今一度中心權威ある綜合状態に持來すべき指導原理

が再要求された。併しながら此の要求は、曾て個性尊重の精神を以て出發した近代生活を、再び中世的なものに歸すのではなく、正しいものを尊重して内面的自發的に無理なく一つになれる原理、個人と全體とが熔融出来る全體的原理の要求であることに注目されねばならぬ。此の傾向の現れは、歐羅巴では獨逸、伊太利、西班牙等の國民主義の中に甚だ顯著に見られる。依然として自由主義的世界觀に執着してゐる民主主義國の英米佛から見ると、獨逸のナチズムも伊太利のファシズムも、共に世界の正理に反する獨裁主義と考へられるのであるが、これは甚だ偏狹な見方であつて、公平に觀察するならば、全體主義的世界觀は、指導者主義である。即ち指導者を權威の中心として總てが一つに綜合されるのであつて、東洋流に言へば王道である。故に伊太利に發した王道形態はファシズムであり、獨逸に於ける其れはナチズムであると云へるであらう。

要するに獨逸、伊太利、及び西班牙と、此の三國に共通な世界觀は、民族悠久の精神を具現してゐる中心的指導者に全體のものが被壓迫感からではなく内的感激から快然と歸一して、大きな民族共同體を作ること存するのであつて、全體的なもの個人的なものとが一つに熔融する文化形態を考へて、全體が新時代的な建設にいそんでゐるのであると思ふ。これはソ聯の其れとは本質的に異なるもので、ソ聯は過去時代の最後の段階に於ける自由主義イデオロギーの轉落的な姿を如實に示してゐるのである。

そこで、さうした運命不可避的な世界史觀に立つて、改めて我が皇國日本の思想、及び儒教國支那の思想を考へ直し見ると、其處には新時代的な指導精神が包藏されてゐることを、我々は判然と認識することが出来るのである。我が國では神人合一、支那では天人合一の語を以て現されてゐる思想があつて、それは同時に力強い實踐を含んでゐるが、

此の思想こそは、之を現代に即して再認識し新生命を注入する事によつて新時代の指導原理たらしむべきものである。若しも之を十分に把握して現代に活かすことが出来たならば、ナチス獨逸も、ファッシヨ伊太利も自分等の行くべき道をハツキリと見得るのであるが、彼等は半ば共鳴しながら、殘餘の半ばは理論的に考へようとしてゐる。長い間の體験から得た傳統を近代に至つて破壊され、神話時代と現代とを結びつける紐帶を失ひ果てた今日、これではならぬと考へて新しく立直らうとしてゐるのであるが、餘りに總てを理論的に見過ぎて我が日本精神のやうに實際に國民を動かす方を持つてゐない。そこで彼等はこれから段々と新指導精神を作らう、として日本及支那に模範を求めてゐるのであるが、併しながら彼等は王道的政治形態に倣ふことは出来ても、皇道政治の形態となることは容易でない。私は獨逸へ行つたときに其の事を明言して來た。そこで次には神道と王道殊に主としては儒教を政治的に考へ直して見たいと考へる。

## 二

儒教は思想的に觀て到底我が神道には及ばないが、而も甚だ雄大なる思想である。それは單なる道德思想でなく、其の中には崇高なる宗教思想、政治思想を含み、更に經濟思想、教育思想をも含んでゐる。簡明に言へば最も中心的な思想として、宗教、政治、經濟の思想が三位一體となつて融合されてゐる。そこで此の場合、儒教の宗教的方面を深く考へ、それと皇道（惟神の道）との關係を研究することは、學問的にも、又、現に我等が直面してゐる東亞新建設のためにも極めて重要であらう。

今日獨逸では宗教といふ事について種々の新説が出てゐる。其の中で最も注目すべきものは Religion の原義たる

「再び結び付ける」といふことに宗教の意義を再認してゐる事である。即ち獨逸人自身の説明に依ると、近代歐洲人は文藝復興期の初めに神を否定して、神から解放せられ、獨立の生活をして得意であつたが、神から自由になつたといふ事は、擁護の暖い手から離れた寂しい孤立を意味することがわかつた。人間の淺い智慧だけで生活してゐたのでは、互に我が儘が出て、對立鬭争が起る、そして遂には世界戦争まで惹き起した。そこで何か生命の大本として縋りつける絶對者が要求される。神若くは神の姿を宿す中心的權威に縋りついて心を空しうして歸一し、孤立の寂しさを克復したい心が漲り起る。此の情操こそは即ち眞の意味の Religion である。教理を説いて、それに囚れるのは末の末である。従つて、基督教的な現代宗教は考へものである、と盛に論じてゐる。自分は一昨年獨逸へ行つてヒットラーに對する民衆の崇敬状態を見て來たが、彼等はヒットラーを生神即ち神から遣された人として限なき崇敬を捧げ、殊に青年等は、基督に歸依することを止めてヒットラーを神と崇めてゐる。そしてゲルマン民族の祖先に歸れと高唱し、二十世紀の神話といふ事を盛に口にして、其の民族精神の具現者、國家的生命の具現者をヒットラーに認めてゐる。伊太利ではムッソリーニが恰も其の役割に當てられてゐるが、彼は甚だ宗教心に篤い人物である。曾てミラノでファッシの祭が擧げられた時の事であるが、民衆の重立つた者等は、力強いファッシの勝利を祝福する意味に於てツァーモの其れよりも一段高い記念塔を作るプランを立てて、其の案を持つて相談に行くと、ムッソリーニは一言の下に之を却けて、其の考へは大間違である、我々は如何に努力しても到底神の力には及ばない、だからツァーモよりも低い記念塔にせよと云つたといふ。これは宗教的敬虔なるムッソリーニの人物を語るものであるが、其の點はヒットラーも亦同じである。ムッソリーニはカトリック的人間であるので、盛に羅馬の神話といふ事を口にする。彼は獨裁者ではなく、神から遣され

た人と呼ばれてゐる事に於ても獨のヒットラーと等しい。だから獨逸でも伊太利でも、民衆は皆心から従つてゐる。これはソ聯のスターリンとは大に異なるところで、斯ういふ意味の宗教情操が獨伊樞軸の歐羅巴にはあるのである。此の様な理念は恰も儒教の天人合一のそれに當るものであらう。

儒教では天を色々の意味に解してゐるが、これは萬物を生んだ本である。漢代に特異の學風を持つ碩儒、董仲舒は、「天は人の宗宗也」と云つてゐる。また易には「天地の大徳を生と曰ふ」とある。要するに天は萬物を生んだ本であり父母であるとする世界觀、宇宙觀が儒教には根本的なものである。さすれば、天があつて萬物が生じたのであつて、天は親として生むもの、之に對して人を含めての萬物は生まれ變つたものである。従つて人間は生命直觀的に天を慕ふ。そして人間的な小生命は天の大生命に歸るべきであるとする直觀が常に働く。これは Religion の原語である Re-ligio の持つ意義と正に符節を合するものである。そこで我等は其の様な意味で儒教の天の理念を今一度考へ直さねばならぬと思ふ。

自分は儒教を以て、本質的には政治哲學であると考へる。そして其の代表的な表現は『大學』に見られると思ふ。大學には「大學の道は明德を明にするに在り、民を新にするに在り、至善に止まるに在り」と見えるが、これは儒教の政治哲學觀を最も明かに言ひ現し得てゐるものである。政治を離れて専ら哲學的に深みのあるのは『易經』と『中庸』とであるが、政治哲學的に最も興味の深いのは大學である。新支那で新民主主義を指導原理としてゐる關係から云つても、將來日支互に固く提携して行く上に於て、大學は甚だ重要な示唆に富む書物であると言はねばならぬ。

明明徳、即ち明德を明にするといふのは極めて簡單な表現であるが、此の簡單な語の中に、儒教の宗教性は最もよく

現されてゐる。これはつまり、將來政治家たらんとする者は其の準備段階として天人合一の修養を完備することを要するといふのであらう。『中庸』には、「天の命する之を性と謂ふ。性に率ふ之を道と謂ふ。道を修むる之を教と謂ふ」とあるが、東洋人の信念では、性とは生れたまゝの心であり、良心であり、純粹意識であつて、それは大宇宙、天、神、太極等の根源に通ずるものである。併し人は、折角其のたふとい性を持ちながら習性、遺傳に妨げられて其れを十分に發揮することが出来ず、また淺薄なる智慧や、私利我慾に蔽はれて明德の光を弱め、往々誤つた行ひをする。故に其れ等の障礙物を撥ねのけて、輝かしい性を發揮する爲には天人合一の行ひに歸ればよい。即ち人間の小我を棄て、天に歸一すれば、必然的に性、明德を明かにすることが出来るといふのである。

そして大學では、其の明德を明かにする方法として格物致知が説かれてゐる。これはつまり修身の法であつて、斯かるプロセスで天人合一の境地に入れる、聖人の境に心を達せしめることが出来るとするのである。ところが此の格物に於いては、朱子と王陽明とで解説が違ふ。朱子は物に格るといふことを、森羅萬象を研究し盡す意味に解して、其處に宇宙の根本真理を認めてゐるが、王陽明は、物を以て卑しい欲望、即ち物慾と解し、之と格闘して克復することを格物としてゐる。そんな風で朱子の解釋は同一でないが、自分は甚だ大膽ながら、朱子の説を参考にしつつ、別途の考へを出した。即ち格物とは根本的な物（即ち道）に格ることであると觀たのである。次に致知とは知を致すで、朱子は物の知識を明かにすることとし、王陽明は良知を致すこととし解してゐるが、何れにしても知とは單なる Intelligence ではなく、叡智の體得であり、宇宙の生命原理の體得である。故に格物致知とは結局、道に没入して宇宙の生命原理を獲得する事である。これで心意が正しく誠實なものとなつて、中心が確立し、外面的な刺激を受けても動かなくなる。それは

宇宙的存在の中に投じて、それと一致するからである。宇宙には無限の變化變動があるが、而も其の無限の動の中に於て中心的なものは常に確立してゐる。四季晝夜の變化はあつても其處には一定の規則がある。だから Cosmos の中に没入することに依つて宇宙の生命原理を獲得した人は、事件の小變動の一々に捲き込まれる事なく、其の波の上に超越して、人格を確立することが出来る。私はそれが儒教に所謂修齊であるとおもふ。

支那では是等の事を専ら理で説いてゐるが、元田永孚翁の進講録にも言つてある如く、儒教の經典は畢竟、我が皇道の註解書であると思ふ。私は曾て太古代には、支那の山東省が日本の地続きではなかつたかと考へるものであるが、結局儒教は神道と同じ根源から發してゐるのではあるまいか。乃ちそんな點から明明徳のプロセスを考へると、これは神道の祭政一致の原理に關聯してゐると思ふ。つまり祭の段階に當ると思ふ。我が國では、神前で神職によつて祭が行はれる場合、その御靈代の御鏡に向つて司祭者の拜が行はれるが、其の御鏡は即ち宇宙生命のシンボルである。従つて此の場合に司祭者は其の主觀的なものを止揚して、意識を真空にし、その中に神の絶對生命を充たされる。その行事が即ち我國では祭であるが、儒教の明明徳は恰も之に當るかと思ふ。支那は理論的に言ふから明明徳であるが、日本では具體的な祭である。我が國で畏き御方が祖宗の神を御親祭あらせ給うて、神と御一體とならせ給ふ御事も、儒教的には之を明明徳とも申せるのではあるまいか。そのやうな意味で儒教と惟神の道とは、理念的と實踐的との相違はあるが、互に深い關係があると思ふ。

更に又、儒教の明德といふことは、之を太陽の光徳とも關係づけて考へることが出来るが、なほ徳といふ事の語源を調べて見ると、徳の字の古文は惠又は惠であつて、直は十目を示す、隅から隅まで明かに照らし見る明らかさであり、



宇宙の靈妙不思議な力である。そして其下には心の字があるから、斯かる力を心に宿すのが徳の意味であつたらしい。ところが其の様な神秘的な生命力を心に宿すと、轉じて人に働きかける。そこで働きを意味するイ(行人扁)を附けたのである。だから徳といふ言葉の中にも宇宙の生命力が自然にシンボライズされてゐる。又我が國の『日本書紀』では徳の字をウツクシビと訓ませてゐる。ウツクシビのとは日であつて、即ちこゝに祖先日本人の考へた絶對生命力の表徴がある。斯ういふ訓み假名が徳の字に附いてゐるのは深意のある所で、これ等も大に研究せねばなるまいと考へる。

性を説き、徳を論じた次には、當然に道といふことが考へられる。この道も稍獨斷の嫌があるが、自分は動のシンボルであると同時に靜のシンボルであると解する。これは勿論宇宙の大生命の働きの重要な部分を爲すものであつて、人體では恰も神經中樞の作用に當る。即ち靈妙不思議な力は其の作用によつて起るのであつて、生々發展して已まない宇宙の大生命が陰陽の旋律を以て無限に伸縮して動いて行く其の過程が道である。易の繫辭上傳には「一陰一陽之道を謂ふ」と書いてゐるが、宇宙の生命力が發動して、或は陰となり、或は陽となり、螺旋的に循環しつゝ展開してゆく其の交互補整の作用の中に生々發展がある、其理法が即ち道である。なほ又易には「乾は首と爲す」とあるが、此の乾は又、太極、神、道と同義語である。太陽が光り輝き、陽氣の發してゐる姿である。總てのものが歸一してゐる本源的なものゝ姿である。乃ち是等の點から考へると、儒教の明明徳と神道の祭とは同一系統の宇宙觀に立つものであることが明かに認識されるのである。

そこで今一度大學の本文に歸つて考へると、明德を明かにした哲人にして初めて政治的支配が出来るのである。即ち政治家の資格が存するのである。そして斯かる哲人の行ふ政治が即ち新民である。此の新民の語は大學の古文には「親民」とある。之を新民としたのは、朱子が改めて以來の事であるが、或は親民の方がいゝのではあるまいか。殊に之を惟神の道の註釋と觀る上からは、新よりも親の方が適切なやうに思はれる。何れにしても文獻を穿鑿することは大切であるが、道を活かして説く爲には、餘りに訓詁註釋に囚れないで、寧ろ飛躍的に想像力を逞しうして續釋するのも一方法ではあるまいか。殊に我々は、祖先の生命を現に宿してゐる分身であるから、其の意味に於て生命直觀的に出す方がいゝ場合があるのでないかと考へる。今までも人が氣まぐれに思ひついて書いた事が、權威的な研究の結果として尊重されてゐる例がある事であらうが、支那などにも其れがあらう。だから餘り文獻に囚れ過ぎず、時に臨んで新しく見直すのは必要な事である。そこで新民、親民何れにしても、要するに其れは、政治の中核思想であつて、明明徳、格物致知、誠意正心、修身の階段を経て哲人になつた人が、天人合一の境地にまだ達し得ない人民に働きかけて、同じ立場にまで引上げるのが、即ち政治である。故に王陽明は「政は正也」と云つてゐる。總てが一に止ること、即ちあらゆる個々が各自の方向を取らずに齊一に歸する所に政治の理想は存するのであつて、對立、鬭争を止めて大調和の社會状態を現す所にこそ眞の政治があることを、儒教は教へ示してゐるのである。

政治は、出来る事なら何處までも教化一方で行きたい。即ち濫に力を用ゐずして教へ諭し、邪徑を行く者を正道に導くことが眼目であるが、併しながら頑冥にして普通の方法では正しきに歸せぬ者があれば、止むを得ず鞭を振つて正道に履み歸らしめねばならぬ、故に政治は觀念でなく、また單なる倫理道德の教だけでなく、強力が伴ふ、即ち明明徳の

實現過程には、文と武との兩方が用ゐられる。これが政教一致である。

さて新民の目的を達成するには、段階がある。第一には齊家である、齊家とは先づ家族に働きかけて、家庭を大調和ある共同團體たらしめることであつて、家のメンバーが各々所を得て特色を發揮すると共に、全體的なものに歸一する所の動中靜ある状態を作るところに、すぐれた政治學の體系が見られると思ふ。第二には親郷である。これは大學の正文にはないが、老子の道德經にある。北京の新政權とよく一體を成してゐる新民會の主張に依ると、此の親郷を齊家に加へたらよいといふのである。これは地方政治の方面であつて、よく一家を治め齊へた人は、その地方(郡市町村)に其の治を押し廣げて、之を立派な大調和の共同體にすべきであるとする。そして其れに成功すれば、第三段には治國であり、更に其の次には世界全體を平和にする平天下である。易には治國平天下の思想が明かな姿を取つてゐる。即ち「乾道變化して(宇宙の生命原理)各々生命を正しうし、大和を保合す云々」とあり、また「首として庶物に出て、萬國咸寧し」ともある。宇宙の生命力を體現した政權が現れて、總てのものに所を得せしめ、大調和を現出すれば、四方に其の徳が光被して、萬國安寧なるを得といふのであつて、八紘一字の思想の一端を易はよく述べ得てゐると思ふ。

八紘一字と云ふと、直ちに 神武天皇の御事に我等の思は馳せるが、易にも神武不殺の語がある。その他『日本書紀』等には、我が 皇朝の事を漢語に表現してある場合が少くないのであるから、此の際漢學の復興は必要な事であらう。漢學といふと支那の學問のやうであるが、今日では既に日本學になつてゐると思ふ。とにかく前來説明して來た通り、新民といふことは、我が國の祭政一致の註釋と見るべきであるといふ事は、既に元田永孚翁の進講録にも明記されてゐる所であつて、我が國の政治は、畏くも大神の公平無私なる御心持を以て、宇宙生命を實際の國策に具現せさせ給

うた御事から發してゐるのである。日本の憲法の上では、天皇は國の元首として統治權を御總攬（第四條）あらせられるのであつて、政治の施行は内閣總理大臣が大御心を奉戴して之に當るのであるが、それ故に國務大臣等の行ふ所は單なる行政事務ではなくして、國策の背後には、暖い宇宙生命的な愛が働かねばならぬと思ふ。即ち日本の現實政治の上にも、それが要求されてゐるのであつて、畢竟、祭政一致といふ事は明明徳、新民と不離の關係に立つものであり、大學の思想と相通じてゐる。

なほ我が日本では、皇室が國家の宗源であり日本國は大家族國家であるから、齊家とは、皇室を齊へさせ給ふ御事である。明治天皇は御自覺的に皇道を御實踐あそばされた御方であらせられるから、長くも皇室典範を御制定になつて齊家を具現化あらせられた。そして親卿は之に關聯を持つてゐる。次に治國の理念は憲法の發布に現れてゐる。此の一事は最もよく皇國の榮ゆくプロセスを示すものであると思ふ。そして次の平天下は日清、日露の兩役に根本方針が現されてゐるが、それが結果として現されんとしてゐるのは、今上天皇の御時代であつて、今や全日本の國民は、日本精神的に目覺めて來た。即ち茲に我が日本は治國を完成して、正に平天下の時代に移りつゝあるのであつて、之を具體的に言へば、東亞新秩序の建設こそは、平天下の實現過程であり、やがて世界全體に光被せしめることが出來れば、平天下は完成するのである。斯の如く日支兩國は大學の思想に於て相通じてゐるが、只支那は理論的であるのに對し、我が日本のは實踐的である所に相違が存するのである。元田永孚翁が之を註釋と言つたのは、深い意味のあることと思ふ。

#### 四

それから又、「大學の道は、明德を明にするに在り、民を新にするに在り、至善に止まるに在り」と云ふ事は結局仁に止まることを意味する。即ち人君としての道の至極は仁であるといふのであつて、儒教は王者の學であるから仁君に例を採つたのである。そして仁とは畢竟、絶對の愛である。個人主義的立場を考へず、又、階級的立場を考へず、民族全體、世界全體を愛する氣持の上に安住しつゝ、明明徳の過程を辿る事である。

次に天人合一といふことは、之を新しく表現すれば、民族全體主義の世界觀に立つて之を行する事である。西洋では民族といふことを對立排他的な考へで見ることが、正しい文化的理念では、自然發生的な生命共同體である。即ちそんな意味で、天人合一とは民族の中に天を具現せることである。民族のことを西洋では Nation としふが、これは拉丁語の Natio から來てゐるもので「生まれたる者」の意味である。即ち「生みたる者」の創造する宇宙の大生命から生れ出たものが Nation 即ち民族である。ところが十九世紀の末になつて、其の本來の意義が歪曲されて排他的に相争ふものの意味に解し變へられた。我々は正しい意味に於て日本民族を典型的な Nation であると解する。之を實踐的に押し廣げて行つたならば、歪められた解釋が改められるであらう。何れにしても悠久な神から（若くは天から）生れたもの、且つ又、永遠の歴史を通じて其の宇宙生命が具現化されたものが民族であつて、其の意味で、民族祖先の神は、同時に宇宙の絶對神であり、民族は天から生れたものである。されば、眞の意味の民族精神に歸することは、やがて現代に於ける天人合一、神人合一であると云つてよからう。

世界的に觀て現代人の甚だ多くは、今や個人主義的、階級的に轉落してゐるが、此の際、明明徳の哲人的な政治が實現されて、低級な思想を持つてゐる者どもに働きかけ、意識を深く掘下げさせて之を正しい民族精神に歸らせるのは、

最も必要な事であつて、惟神の道及び新民主義は、即ち其の使命にあるものと思ふ。獨逸のヒットラー、伊太利のムッソリニは確に哲人であり、一身を捧げて明明徳の指導に當つてゐるが、歐洲人はなほ理論に流れてゐる。乃ち其の點で、理論に囚れてゐる現代人に働きかけ、之を同じ世界觀に導くべく再教育するのは日本の任務であつて、「斯道ハ實ニ我カ皇祖尊宗ノ遺訓ニシテ、子孫臣民ノ俱ニ遵守スベキ所、之ヲ古今ニ通シテ謬ラス、之ヲ中外ニ施シテ悖ラス」とは、誠に超絶的に偉大なる御言葉と拜せられる。私は一昨年獨逸で學者たちに會つた時に、それらの人々は、普て自由主義時代には、歐羅巴が先進國だと考へられたが、今の全體主義世界に於ては、君の國の方が先進者であると語つた。所謂お世辭にしても、我が日本こそは實際に世界に於けるすばらしい存在であると云はねばならぬ。

何れにしても儒教の天人合一の理念は、宗教的な深い理念であり、同時に又、現時のナチズムもファシズムも、宗教的な深い情操であつて、それは正に「斯道」の歐羅巴に於ける現れであると觀られるが、天人合一、神人合一が、徹底して具體的に現れてゐるのは只我が日本だけである。其處には絶対の神が純粹な血に依つて現實に繋がれてゐるのであつて、其の意味に於て我が國は、新時代世界の中心を成すものである。これが近頃漸く支那人及び一部の歐洲人にも分りかけて來た。そして其れ等が一つの力に相寄つた時には、英、米等の國々は或は衰弱するかも知れないが、全體主義の國は發展と榮昌との道を行くことゝなるであらう。そして世界の國々が皆全體主義になれば、其の中心が事實に於て我が日本であることは、論理的にも歸結せられる所であらう。日本の學界は今や思想的植民的事の陋習を一擲して正しき日本に歸り、世界を全體的に指導して行く時代に臨んでゐるのである。